

鏡日 元巳に屬し、年芳 具に所^に任^り。開花 巳に樹を匝^り、沅嚶 復た枝に滿つ。洛陽
繁華の子、長安 輕薄兒、東 千金の塚に出で、西 鴛鴦の波に臨む。遊絲 空に映じて轉
じ、高楊 地を拂いて垂る。絲幃 文 照耀し、紫燕 光 陸離たり。清晨 伊水に載れ、
薄暮 蘭池に宿る。象筵 竇瑟鳴り、金瓶 羽唇泛ぶ。寧ぞ憶わん春鷺起き、日暮 桑葚之
人と欲せんとは。長袂 雪、以て拂い、彫胡 方に自ら炊く。爰すれども見るべからず、宿
昔 容儀を減ず、且く當に情を忘れ去るべし、歎息 獨り何をか爲さん。

簡文曰く「春日詩」に

年還つて樂まざるに清つべく、春歸つて思ひまた生ず。桃は含む可憐の紫、柳は発す斷腸の青。
落花は燕に随つて入り、游絲は蝶を帯びて驚く。邯鄲 歌管の地、許されなば情を留めんと
欲す。

とうたい 沈約もまた「會園臨春風」にいう。

春風に臨む。春風 春樹に起る。遊絲 暖として網のごとく、落花 秀として霧に似たり。
まず泛ぶ天淵の池、また過ぐ細柳の枝。蝶逢之ば飛んで搖颺し、燕値之ば羽差池す。桂旂を
揚げ、芝蓋を動かし、燕裾を開き、越帯を吹く。越帯 飛んで参差、燕裾 合して且つ離る。
簪を廻りまた黛に轉じ、顧歩 容儀を惜しむ。容儀 巳に炤灼、春風 また廻薄、氛氳 桃
李の花、声跗 素萼を含む。既に風の開く所となり、また風の落す所となる。絲蒂を搖かし、
紫莖を抗かす。春雪を霜わし、流鶯を雜わらしむ。曲房開かれ金鋪響き、金鋪響きて妾が思
い驚く。梧桐未だ陰あらず、淇川始めて碧なり。行雨を高唐に迎え、歸鴻を碣石に送る。洞

屏を經、素紙を響かす。幽闇を感せしめ、帷幕に思ひしむ。想う、芳園の以て逝くべきを、
念う、蘭麝の漸く摘むに堪えたるを、明鏡の冬塵を拂い、羅衣の秋裳を解くならん。既に鏗
鏘として以て佩を動かし、また氤氳として麝を流す。始めは搖蕩として以て闇に入り、終に
徘徊して隙に縁る。珠簾を綺戸に鳴らし、芳塵を綺帟に散ずるならん。この時、悵として婦
を思ふ、安んぞよく行役せん。佳人、茲に在らず、春風、誰が爲にか惜しまん。

どうやら梁代に皇帝たちが好んでうたつたのが遊糸を詩中にとりいれる流行を誘つたらしく、
以後、庾信が「春賦」に「一叢の香草は人を礙ぐるに足り、數尺の遊糸は即ち路を横ぎる」燕
歌行」に「洛陽遊絲百丈連り、黃河春水千片穿つ。桃花顔色好きこと馬の如く、榆莢新に開いて
巧なること錢に似たり」などとうたい。唐に入って盛照鄰「長安古意」に「百丈の遊糸は争つて
樹を繞り、一羣の嬌鳥は共に花に啼く」、杜甫「白絲行」に「落絮遊絲また情あり、風に隨ひ日
に照り宜しく輕攀すべし」、一宣政殿退朝晚出左掖」に「宮草微微として妾佩を承け、鐘烟細細
として遊絲を駐む」のようにほとんど枚挙にいとまがない。

これらの例はいずれも「残糸曲」と通うところがあり、ことに陳の陰鏗の「和查百花亭懷荆楚」
の「落花輕くして未だ下らず、飛絲断えて飄い易し」や杜甫「題省中院壁」の「落花遊絲白日靜
かに、鳴鳩乳燕春深し」の句を見ると、韻がそこからただちに点化したのが「残糸曲」の初二
句かとも考へたくなる。従つて残糸を遊糸だと断定したくなる。しかし「残糸曲」に「ちかえ、
てその残糸に柳枝と蛛網を容れる余地がまったく無くなつたか」といふと、それでもない。齒切れ
のわるいことだが断定するのはもうすこし待つて、次の「欲断」を考へよう。

「サキに引いた庚信の「小園賦」に見える壺公は「神仙伝」がつたえる人物で、のちにくわしく述べるが、その記事中に、壺公が仙人志願の費長房を試すうとして石室に入れた、頭の上に大きな石が縄でぶらさげてあり、蛇が来て縄を噛む。人縄即ち断えんと欲し、たが長房は自若としていた、という話がある。この「欲断」を買が借用したのだとすると、残糸は柳糸または蛛網の方向に傾く。沈約の「詠青苔」にいう。

階に縁、て已に漠漠、水に汎んで復た綿綿。微根は断えんと欲するが如く、輕絲は更に聯るに似たり。長風は細草を隠し、深堂は綺綰を没す。繁樹するも人の贈る無く、葳蕤なるも徒に可憐。

この「欲断」に学んだとすると、「微根、輕糸」に当る残糸は遊糸に傾く。隋の蕭愨の「春賦」に「二月鶯声綾々に断えんと欲し、三月春風已に復た流る」を移せば、柳糸とも遊糸とも働かせうる。

垂楊葉老 鶯哺兒
Twie yang iap. lau Eng buo. nie

殘絲欲断 毒蜂歸
dzan. si iwok. tuan twang. bung. kywe i

「サキに記したように、この二句は押韻して「*aw*」しか「兒」が上平と支であるのに「歸」は上平と微（独用）で、音標化した *nie* と *kwai* が明らかに示すように、脚韻としては不完全だが、しかし共に上平で、隣接する近似韻だから、まったくつながらぬというわけでもない。まさに「微根は断えんと欲するが如く、輕糸は更に聯るに似たり」というべ簡法だ。それならば意味的展開においても「縁がに断えんと欲して、已に復た流る」の工夫が凝らしてあるのではない

か。初句に「易」大過の「枯楊生稊。老夫得其女妻。无不利」の影がさしてゐるかもしれない。こゝはさきにいった。それならこれに対する「枯楊生華。老婦得其士夫。无咎无譽」が二句に応じる。枯楊 華を生ず。老婦その士夫を得たり。咎もなく譽もなし。

老いた寡婦が若い夫を得た場合で、わるくもないが、ほめたはなしでもない、といふのだ。その解説といふべき「象」に「枯楊の華を生ずる、何ぞ久しかるべけんや」といふのは一般的にいってその通りだが、続けて「老婦も士夫もまた醜とすべきなり」といふのは、もとの无咎无譽の否観から逸脱した儒教くささを感じさせる。ともあれ、初句の「垂楊兼老」が老夫とすれば「蕪哺兒」は女妻。従つて「殘絲欲断」は老婦、「黃蜂歸」は士夫にあたる。「絲」が柳系か蛛網か、遊系かは断定できぬにせよ「殘」は老と結び易い文字で、それならは年を経し系の乱れの苦しさ、に衣の館はほころびても不思議ではなく、そのほころび口から若い黄蜂が舞いこんできて、これもまた訝ることはいらぬ。もっとも「殘」はそのまゝ「老」ではない。「易」の老婦をきまじめにここに移すのは野暮で、夫は老い、子は手離れたが、まだ若さを失つてはいない無為閑暇の女を想像すればよいだろう。

「埤雅」に「黄蜂は密なく纖長、その窠は屋に仰縁し、漆を銜んで以てその蒂を固くす。陰陽は尾に在り、喜びて末端を合す。岐あるものは花、鋭きものは牡なり」といふ。東哲の「癸家記」に「蜂は蜘蛛を食う」といふ。このような動物学的知識が李賀の詩作の前提としてあつたかどうかはわからない。「黄蜂」の語を詩に使つた前例を検出しえないが、のちに融れるように李商隱や陸龜蒙には現れるので、あるいは李賀が先駆をなしたのかもしれない。唐棣黒漆の苦味はしつた青

年のイメージがあり、それだけで充分な感じもするが、蜂についての先人の作と突き合せておこう。あゝ品物の蠢蠢たる。こゝれ貞蟲の明族、叢瑣の細蜂あって、また名を羽翼に策す。近く園香に浮遊し、遠く林谷に翔翔す。こゝに翔びこゝに集い、運のごと轉じ組のごと廻る。紛紜として雪のごとく亂れ、混沌として雲のごと積る。鼻は燿靈を翳い、響は風雷より迅し。

晋 郭璞 晉蜂賦

風を逐うて徒ら泛漾し、日に照されて下ち依微たり。舌が留眇せざるを知り、花を銜みて空しく自ら飛ぶ。梁 顧文帝 蜂

遊戯して晴風より下り、芳を尋ねて菊叢に到る。聲を帯びて蕊上に來たり、影を連けて香中に在り。去住して餘飄に露の高低して過風に順う。終に慙す蝴蝶と異り、夢魂と通ぜざるを。唐 耿湋 寒蜂寄菊

郭璞のは蜜蜂をうたうが引いた部分は蜜蜂に通じ、蜂の作の後半部を誘い出す要素がある。簡文の蜂は女性的だが、恋愛感情を含み、耿湋のは成らぬ恋だが蜂には男性的なイメージがある。

小苑 華池 爛熳と通じ、後門 前楹 思ひ窮りなし、宓妃 腰細くして纒かに露に勝え、焮后 身軽くして風に倚らんと欲す、紅壁 寂寥 崖蜜 尽き、碧簾 迢遞 霧縈 空し、

青陵の粉蝶 離恨するを休めよ、長定て相逢わん二月の中 寺商陸 蜂

紅露の花房 白蜜の脾 黃蜂 紫蝶 兩ながら参差。春窗一たび覺む風流の亭、却って是れ同袍も知るを得ず。同 蘭情

春庭 曉景の別れ、清露 花 遷延たり。黃蜂 一過 慵く、夜夜 香簾に棲む。陸龜蒙

これらは李賀より後の人の作で「殘糸曲」を読んで知っているはずの人である。いすれも個性のきわだった詩人だから、羊んでも粉本を窺わせぬが、わたしが首の蜜蜂から得たイメージが、首のあるいはほ同時の詩人が蜜蜂に託そうとした隠喩とあまり隔らぬことは確かだ。させてくれる。

五

緑髻少年金釵客

「緑髻」を字書は「漆黒のびんずら。むすめの髻にいうVと説明し、「子夜冬歌」感時爲歡歎、白髮絲髻生。一吳均、閨怨詩「緑髻愁中改、紅頰啼裏減。一高知之、從軍行「沉復落紅頰、蟬髻摧綠髻。一崔颢、盧姬篇「盧姬少年魏王家、緑髻紅脣桃李花。を例にあげる、字韻の作としては疑わしいが「少年樂」の「緑髻髻墜、鬢雲起るVも女の髻だ。しかしここでは王琦のいうように「緑髻年少は男子を指し、金釵客は女子を指す。

とすべきだろう。梁の武帝が「子夜冬歌」で

別れし時、鳥門戸に啼けり、今晨、雪、墀に満つ、此を過ぎて君返らずんば、但だ恐る緑髻の衰えんことを。

とうたい、「河中之水歌」で、

河中の水は東に向つて流る。洛陽の女兒 名は莫愁。……頭上の金釵十二行、足下の縵羅五文章。……

という。「緑髻」と「金釵」の組合わせくらいは前例がなくとも作るのが詩人だが、梁の武帝の作は髻が親しんでいたと察せられるから、やはり参考してよいだろう。ここでのかれの腕は、一般に女性のものとして使用される「緑髻」を男性の形容とし、「客」という男性に多く使用される文字を「金釵」と結んで少年より少年長の女性を表現している点にあるだろう。

ついでに書いておく。髻には、走馬客（走馬引）、秋風客（金銅仙人詩漢歌）、新豐客（致酒行）、重遊客（昌谷讀書）、終桐客（章和二年中）、風塵客（公無出門）などの語があるがいずれもかれの造語らしい。

縵粉壺中沉琥珀

△「沉琥珀」は何をいおうとしてるのかさっぱりわからぬ△と劉辰翁がいつているのは正直だ。呉正子が△沉琥珀、酒の色が琥珀に似ている△という。琥珀の説明にはなつても「沉」字の解釈にはなつていない。以後、唐沈氏守は送釈書では、ほとんど放置された。日本語訳では「方向」4（一九五四年）にのせた拙訳がはじめかと思ふが△は△なだの玉のさかづきに琥珀の酒をそそぐかな△とした。△そそぐ△は言しまぎれで、それでも「沈」字の音がいくらが生きようかという氣持だった。

空色のつばには酒が琥珀色に沈む。 荒井健

青白色の琉璃の酒壺に琥珀色の酒をたた文（それを飲んで）。 鈴木虎雄

青磁の壺をさしのぞく。 / 見れば、ふかまり沈むもの、とろりと光る琥珀いろ。 斎藤暎

From goblets, powder-blue, are quaffing, / A liquid amber. J.D. Frodsham

繁簡々まゞ、まだが、この句を訳すにはどうするほがあるまい。そのことを充分承知したうえで

この句の奇異な味わいが何処からやってくるのかを突っ込めないかと思ふ。

周誠直『李賀論』は「残糸曲」について分析的に論じているので後にその全体に関して述べる

つもりだが、問題の部分をまず引く。

「縹粉壺」は青白色で、「琥珀」は黄色だ。これは少年と少女がよりそうのを暗喩する。琥珀は重いもの、だから「沈む」。沈郎青錢は重いもの、だから「起作廻風舞」でない。ただ琥珀の「沈む」のはまた一つの原因がある。消耗させられてしまったのだ。だから「沈琥珀」はまた「落花起作廻風舞」とつりあっている。酒は人に飲まれてしまえば、落花は人に踏みしだかれる。また落花は人に踏みしだかれることを甘受せぬ、だから「起作廻風舞せねばならぬ」。

鋭い指摘で、この詩の構成に対する考察は示唆に富む。

さて、わたしはこの句を解くために二つの説話を提出したい。第一は壺公説話、第二は巨靈説

話で、ともに壺にまつわる話である。

壺公は、その姓名はわからない。……当時、汝南で、費長房という者が市の儒官をしていて、

ふと壺公が遠くから来て市に入り売弄するのを見た。人たちはかれを識らない。相手を見て
値をかえることはなく、投棄すればみな治癒した。……いつも空の壺を屋上に懸け、日が暮
れたのち壺の中に跳んではいった。見た人はないのだが、長房だけが楼上からこれを見て、
常人でないことを知った。長房はそこで日々みずから壺公の店さきを掃除し、并当を用意し
た。壺公はことわらずに受けとった。……壺公が長房にいう「暮れて人がいなくなつた時ま
たおいで」長房が言われた通りゆくと「わしが壺の中に跳んではいるのを見たら、あんたも
わしのまねをして跳ぶがいい。自然にはいれる」長房は言われたようにわがらめうちにはい
っており、はいってしまふともはや壺ではなく、見えたのは仙宮世界の楼台や幾重しの門、
閻道などで、壺公の左右には侍者數十人、壺公が長房にいう「わしは仙人だ。いぜん天の役
人をやつたが、勤務怠慢の咎で人間界に流されたんだ。……」
神仙伝 太平記巻十一
ただ、一人の女がいて（漢の武）帝にいとしがられた。名を巨靈という。帝の傍に青い珉の
唾壺があつたが、巨靈はたちまちその中に入つたり出たり、帝の前でたわむれたりした。東
方朔が遠くから巨靈を見て目くはせした。巨靈はそれで飛び去つた。遠くから見ると青雀に
変身した。それが飛び去つたので、帝はそこで青雀台を建てた。時々青雀の求るのを見たが
巨靈は見えなかつた。

別国洞冥記第四 漢魏書

「神仙伝」は晋の葛洪の、「別国洞冥記」は漢の郭憲の撰といわれる。それは信頼できないが
六朝の末までには成立していた説話であることは間違いない。巨靈の話の人遠くから見るとVと
いうところ、原文では愆字が脱字があるような感じもしわかりにくい。しかしその分りにくさ

が夢をみているような感を誘っておもしろい。

そこに出てくる壺が青瑛で、珉とは玉よりは少し程度のおちる宝石である。唾壺というのは汚らしく肉感的な感じがするが、その汚ならしさは肉感を除けば、すなわち賀の詩の「縹粉壺」となるではないが、呉正子はいう。

縹は青白色。雞跖集に、琉璃瓦はこれを縹瓦と謂う。と。魏略に、大秦國は十種の琉璃を出だす。縹はその一なり、と。ここに縹粉というは、あるいは琉璃壺ならん。

いうところの大秦國が史実としての何処をさすのがわからぬが、呉正子が引き出してきた琉璃壺は青味を帯びた透明なガラスの壺と推察できなくはない。「琥珀」について呉正子はいう。

酒色、琥珀に似たり。太白の詩に、魯酒は琥珀のごとし。

李賀自身「將進酒」で、琉璃の鐘、琥珀濃し、とうたっている。ここでも表層では酒の色を指すことは動かぬが、深層では琥珀はただちに前の句の金釵客となり、金釵の客が巨壺のように壺中に入り、うっとり沈んでいる。縹粉壺は、すなわち緑髻少年であり、金釵の客をひたり抱いている。

緑髻少年 金釵客 Liwok. pién' siáu' rien k'iem ts'ai k'ak.

縹粉壺中 沈琥珀 piáu' p'ian' juo' tiung diem' kuo' pak.

二句、客と壺が入声20陌で完全脚韻であることにはすでにいったが、金と沈もまた下平21侵。言韻からいって両句の下半身はほとんど融合し、緑髻と縹粉、金釵と琥珀は色彩としてほとんど一致し、たがいに結合溶和して、妖豔はすでに典雅の域にまで沈静じている。

この詩の舞台は小園で、しかし壺中の天といふべき別世界、無憂の館、主は壺公のような謫仙だがすでに垂楊さながら葉は老い、園内での権勢は漢の武帝に似てもそろそろ後継者を考之ねばならず、さいわい鶯のように可憐な少婦を得、少婦は子を産んで離れようにはぐくむ、子はしかし育てば遊系のように飛散し、張った葉にかかった少年は仙にはあつても人情はすてきれず、費長房程の愚直さはなく、東方朔のように狡猾で、無為閑暇をかこつ少婦に目くばせし、壺的世界にさらに縛粉壺を幻出して、そこに少婦をさそひこむ。

わたしには、この詩の前半が、そのように読める。

花臺欲暮香餘云

花臺は花を見るための樓台とも花のさいている高台ともとれる。さきにわたしはこの句を入花の台の、くれぐれに、春まかりめとVと訳し、このたびの試訳で少し変えたが、もとの方が限定しすぎなくてよかつたかもしれぬ。

この句で注目すべきは、第二句へ残絲欲断、蜂歸Vと、「絲鬚」「縹粉」両句をはさんで、キつちり照応することである。そのしるしに第二句の「欲断」と同じ場所に「欲暮」がはめこんである。やつて来た(歸)ものが、事のちに、立ち去る(辭去)のだとすると、「春」は「暮」

ですなりち少年であり、「花台」は「残糸」で女だということになるう。

落花起作迴風舞

この句には『別国洞冥記』の麗娟説話が伏せてあるようである。

武帝が愛した宮人で、名は麗娟。年十四、玉の膚がやわらかく、はく息は蘭より香ばしい。衣や纒でさわられたがらないのは体にきずがつくのを恐れたからだ。歌うたびに李延年が伴奏した。芝生殿で迴風の曲を歌唱すると、庭中の花がみなちり落ちた。麗娟を明離の帳のうちには居させたのは塵がその体を汚すのを恐れたからだ。帝は帯で麗娟の袂を褌り、幾重もの幕の内に閉じこめたのは、風のまにまに飛び去るのを恐れたからだ。麗娟は琥珀で佩じ玉をつくり、衣の裾につけ、人に知れないようにした。そこで骨の節が自然に鳴るといって、人々は不思議がった。巻四

迴風の歌に庭中の花が飄落したように、辞去の声とともに薄粉壺中の女は振りおとされる。だが力をふりしぼり身を起し春に追いつかろうとする。気まぐれなつむじ風はたわむれさえぎ、て女に舞いかかる。女は狂乱して空にたふし、やがてまた、地に墜ちる。

沈約の「会圃臨春風」にいう。

春風に臨む。春風 春樹に起る。遊絲 暖として網の如く、落花 秀として霧に似たり。先ず泛ぶ天淵の池、還た過ぐ、細柳の枝、蝶逢之は飛んで搖颺す、燕値之は羽差池す。桂苑を

揚け、芝蓋を動かし、燕裾を開き、綉帯を吹く。綉帯 飛んで参差、燕裾 合して且つ離る。香を回り復た寂に轉じ、韻歩 容儀を惜しむ。容儀 它に招均、春風 復た回薄、氛氳 桃李の花 青跗 素萼を含む。既に風の開く所となり、復た風の落す所となる。

詞の「河南府試十二月樂辭二月」に「香颿として起舞す、綉帯の句があつて状況としてはかなりよく似る。多くの注家は「落花は起つて作す廻風舞」と訓じたし、もそう思いこんでいたのだが、第五句までの構成から推すと「落花は起作す」廻風舞と訓じたし、もそう思いこんでいたのらる。「江樓曲」の「鯉魚風起り芙蓉老」は構成的に似た句であらう。

韻法からいへば、この句だけが韻をふまないの、第一句と第二句、第三句と第四句のき、ちりした村可を、第五句と第六句ではくすしていることを、その韻のふみはずしによつて示しているのかもしれぬ。いすれにしても「落花起作廻風舞」には「落花起つて作す廻風舞」と、落花は起作し廻風舞舞うとの両方に収斂しつるものが一句に収斂してあつて、クライマックスが、そのまま、クライマックスであり、壺中の雲といふ二重の夢想の世界が同時にくだけ散る裂け目となつてゐるのだ。

余談ながら、宋の劉克莊「後村詩話」卷二にいう。

將に飛ぼんとして更になす回風舞、已に落ちて猶お成す半面の妝。宋景文の落花の詩なり。世の祢するところたり。然れども李義山も固より云う。落つる時なお自ら舞い、掃きし後、さらさら香を聞く。下句、尤も妙なり。